

## 北中米における発掘調査資料の活用事例

—文学研究科プロジェクト経費『日米の共同発掘調査による大学院生の人材育成プロジェクト』調査報告

新 谷 葉 菜

考古学専門 博士前期課程 1年

### はじめに

2010年7月17日～27日にかけて「日米の共同発掘調査による大学院生の人材育成プロジェクト」においてアメリカ合衆国ワシントン州を訪れる機会を得た。本プロジェクトの目的は、日米の考古学研究者と学生が共同で発掘調査を行い、両国の調査方法の共通点と相違点を認識し、違いが生まれてくる背景を考究するとともに英語でのコミュニケーションを通じて国際的な人材を育てることであった。プロジェクトではDale Croes教授(South Puget Sound Community College)が行うワシントン州クックアス遺跡の発掘調査への参加が予定されていた。しかし、今年度はクックアス遺跡の発掘調査が急遽実施されなくなったため、日米共同の民族考古学的調査に変更された。

Dale Croes教授がワシントン州のアメリカ・インディアンの多くの遺跡や博物館を案内してくださった。そこでアメリカ北西海岸のインディアンの歴史や生活、遺跡発掘の歴史や発掘方法まで詳細に教えていただいた。加えて、7月19日～7月24日の期間にはTribal Journeysというアメリカ北西海岸のインディアンのイベントが開催されていた。Tribal Journeysは1989年にアメリカ北西海岸のインディアンがワシントン州の100周年を祝福したことがきっかけとなり、1993年以降毎年開催されている。その年の主催地に集まるイベントで、目的地を2～4週間かけてカヌーで目指し、到着すると約1週間をかけてポトラッチを開催する。ポトラッチのProtocolでは、それぞれの部族が歌と踊りを披露する。2010年の目的地はワシントン州オリンピック半島に位置するNeah Bay(ニアベイ)であった。滞在先に近かったためTribal Journeysにも参加し、ポトラッチを観察することができ、考古学だけでなく文化人類学的知見を得ることができた。

本稿では、まずオゼット遺跡の発掘資料が管理・収蔵されているMakah Museum(Makah Cultural and Research Museum、以下マカー・ミュージアム)の様子

を述べ、次に筆者の専門とするメソアメリカ地域のなかでもエルサルバドル共和国のチャルチュアパ遺跡群の資料が収蔵および展示されている遺跡公園博物館の様子を述べる。最後に両国の博物館の比較を試みる。

### 1. アメリカ合衆国マカー・ミュージアムの事例

#### 1-1. マカー族

ワシントン州オリンピック半島の先端部47万平方マイルを保留地としているのがアメリカ北西海岸のインディアンであるマカー族である。マカー族は自身のことを“Kwih-dich-chuh-ahtx”もしくは“people who live by the rocks and seagulls”(岩とカモメのそばで暮らす人々)と呼ぶ。“Makah”(マカー)という呼び名は近隣のインディアンによって与えられたものであり、「食べ物に寛大な」という意味をもつ。

考古学調査によって約3,800年以前からニアベイに居住していたことが明らかとなっている。彼らはカヌーに乗って魚、クジラやアザラシなど海獣を獲物とした漁労を行い、ベリー類を採集する狩猟採集民であった。彼らは杉(Western Red Cedar)の板を組み合わせたロングハウスに住み、杉の皮を剥ぎバスケットや帽子を編んだ。マカー族はかつてDiaht(ディアット), Waatch(ワアッチ), Ozette(オゼット), Tsos-Yess(スーザーズ), Bahaada(バハイダ)という5つの村に分かれて定住していた。現在は漁獵など主に経済的な面でニアベイがマカー族の中心地となっているが、5つの村にもそれぞれの子孫が暮らしている(写真1)。また、マカー族は捕鯨権を条約で保障されている唯一のインディアンもある。

2010年のTribal Journeysの主催はマカー族であり、アメリカ北西海岸インディアンや他地域の民族の100艘近いカヌーがニアベイに集まった。6日間をかけてポトラッチを開催し、集まった人々をマカー族がもてなした。

マカー族の保留地内には、かつてマカー族が漁を行



写真1 マカー族の旗（5つの村の名が記してある）



写真2 オゼット遺跡を発掘した Richard Daugherty 博士（右から2人目）

うためにキャンプをしていた Hoko（ホコ遺跡）や、定住していたが放棄された村である Ozette（オゼット遺跡）などが存在する。ホコ遺跡はホコ川河口近くに立地するマカー族が漁をするために季節ごとに利用した場所である。Dale Croes 教授によって実施された発掘調査で、およそ 3,000 年前の遺物が出土した。低湿地遺跡では木製の遺物、纖維質の遺物の遺存状態がよく、出土した 5,000 点近くの遺物の中にはバスケット、帽子、マット、漁網、木製の釣り針などがあり、遺跡の性格などを知るうえで重要な資料となっている。遺跡の発掘にあたってはマカー族の協力があり、聞き取りから現在高齢のマカー族の祖父の代に実際にこの地でキャンプを行っていたことが明らかになっている。オゼット遺跡にはマカー族が約 2,000 年にわたって居住していた。現在はトレッキングコースの一部になってしまっておりキャンプ客でにぎわうが、定住者は 1917 年以降いない。1917 年、子供たちに教育を受けさせるためニアベイに移住するまでは 1 マイルに 40 軒のロン

グハウスが立ち並び、約 1,000 人が生活していたとされる。1970 年に嵐で海岸が浸食を受け、板材や木製の釣針、鉛、カヌーのパドルなどが現れたことを受けてマカー族が Richard Daugherty 博士に調査を依頼した（写真 2）。1981 年まで続けられた発掘調査では土砂崩れによって泥に埋まったロングハウスが検出されたが、村の大半は今も泥に埋もれたままである。オゼット遺跡ではロングハウスの建材、動物骨、カヌーのパドル、バスケットなどの多くの有機質遺物が出土しており、遺物の総数はおよそ 55,000 点にものぼる。

## 1-2. マカー・ミュージアム

Makah Museum（マカー・ミュージアム）の正式名称は Makah Cultural and Research Museum であり、アメリカ北西海岸のインディアンであるマカー族の文化および歴史を主に考古遺物の展示によって紹介する博物館である。マカー族の保留地内のワシントン州ニアベイに位置している。

1970 年より始まったオゼット遺跡での発掘調査で得られた遺物の解説および研究のために 1979 年に開館した。博物館の目標を①マカー・インディアン・ネイションの言語、文化、考古学的資源の保護、保存、②言語、文化的マネジメントに関する、マカー族評議会や他関係機関への方針の決定、③マカー族や公衆へのマカー・インディアン・ネイションの文化財や言語に関する教育、④マカー・インディアン・ネイションや学術界に有益である調査の活発化、⑤マカー族の人々の経済発展の促進としている。

常設展ではオゼット遺跡の遺物を製品ごとにショーケースで展示し、加えてジオラマ、原寸大レプリカのロングハウスとカヌーを展示している。レプリカのロングハウスやカヌー、パドルには触れる事ができ、その質感や重みを体感することができる。マカー族の古い写真や伝承なども展示され、マカー族の歴史を考古遺物、テキスト、写真を介して解説している。博物館内で展示されている遺物は発見された内の 1 % であり、残りは博物館の隣に立てられた収蔵庫に収められている（写真 3）。

博物館内のミュージアムショップでは関連書籍や商品だけでなく、マカー族の手作りによる杉の皮で編んだ帽子を購入することが可能である。

博物館ではマカー語の保存と指導のために言語プログラムも開かれている。言語プログラムの目標は、①マカー語の保存、②マカー語が流暢に話されるための言語の復元、③子どもや研究者を教育し、他地域の民



写真3 マカー・ミュージアム脇に立つ博物館の収蔵庫

族との比較やさらにその民族の文化財の維持を可能にすることである。具体的には調査、テキストの分析、カリキュラムの発展、ニアベイ小学校と高校でのマカーラー語の指導における指揮を執っている。

博物館の収集局では、博物館の収蔵品として60,000点以上の遺物を管理している。同時に他博物館所有のマカーラー族に返還される文化財についての調査を行っている。

マカー・ミュージアムの活動資金は連邦政府、個人、博物館入場料、ミュージアムショップの売り上げなどによってまかなわれているほか、マカーラー族の評議会が運営費の4%を支えている。

### 1-3. 考古学とマカーラー族

ホコ遺跡やオゼット遺跡の例のように、マカーラー族は発掘の段階から博物館設立、その後の管理・運営、教育活動まですべてに関与している。Dale Croes教授によると、調査者である考古学者との関係も良好であり互いに情報を共有しあっている。考古学者は発掘で得られた情報をインディアンの人々に還元し、インディアンの人々は民族の伝承などを考古学者に提供する。情報公開の姿勢を基本にしているからこそ、信頼関係という良好な関係を築けているようであった。オゼット遺跡での発掘は考古学者とインディアンの協力の下に行われた優れた調査であったこと、考古学者がマカーラー族の歴史理解へ貢献したことを高く評価したことが紹介されている（Renfrew and Bahn 2004: 64）。

マカーラー族は発掘によって得られた資料を祖先からの贈り物であると考えており、それらを収めているマカー・ミュージアムは素晴らしい博物館であると認識している。

## 2. エルサルバドル共和国の事例

### 2-1. 国立遺跡公園

エルサルバドル共和国（以下エルサルバドル）は中央アメリカに位置し、メソアメリカの範囲に属している。エルサルバドルでは現在までに約670カ所が遺跡として確認されており、その内の6遺跡（タスマル、カサ・ブランカ、サン・アンドレス、ホヤ・デ・セレン、シワタン、コリント）が国立の遺跡公園として整備されている。

本稿ではカサ・ブランカ遺跡公園における筆者の所見を述べる。カサ・ブランカ遺跡公園は、エルサルバドル西部サンタ・アナ県チャルチュアパ市に位置する。遺跡公園内には6基の建造物があり、発掘調査および保存修復が行われてきた。また火山灰層や建造物の構造を見学することができるよう屋外展示が設けられている（写真4）。公園内には博物館が併設されており（写真5）、発掘調査で得られた土器、石彫、黒曜石などが展示されている。博物館内には藍染を紹



写真4 カサ・ブランカ遺跡公園の屋外展示



写真5 カサ・ブランカ遺跡公園の博物館中庭

介する展示とともに藍染工房があり、藍染め体験をすることができる。藍染め製品を購入できることもあって、藍染めは観光客から好評を得ている。

ワークショップや発掘調査報告が博物館内で開催されており、研究者と見学者をつなぐ場としても機能しているようである。

## 2-2. 考古学とエルサルバドルの人々

1995年から京都外国語大学が開始したエル・サルバドル総合学術調査では、調査終了後の遺跡を託せる人財育成が重要なテーマとされ「フィールド学校」で現地の学生が育てられた（大井2000）。カサ・プランカ遺跡公園内の藍染工房も地域の住民との交流のためにこのプロジェクトで設立された。

カサ・プランカ博物館では青年海外協力隊の支援を受けて、ワークショップが近年開かれるようになった。ワークショップは、教師や8～12歳の小学生に向けて開かれており、地域博物館が文化資源として有している考古遺跡の有効利用について具体的な提案がされている。

また青年海外協力隊隊員の池田瑞穂氏によると、近年発掘が始まったヌエバ・エスペランサ遺跡では遺跡周辺住民の地域への帰属意識が高く、地域のアイデンティティや文化への関心も高い。小学校教師達が中心となって、地域で出土した遺物を展示し次世代に教えるための博物館を設立することが提案されており、エルサルバドルの人々の考古学や歴史への関心は高いようである。

## 3. 両国の博物館を比較して

アメリカ合衆国マカー・ミュージアムの事例とエルサルバドルの遺跡公園の事例をとりあげた。

両者では遺跡の性格や規模が大きく異なる。また博物館の運営方法も異なっている。しかし、双方とも地

域に根ざした博物館としての活動に重きをおいており、地元住民の考古学への関心に応えようとしている点は同じであるようにみえる。小学生～高校生の見学促進、言語プログラム、ワークショップを開くことで地域へ開かれた博物館を体現している。マカー・ミュージアムではTribal Journeysの期間中に、博物館脇をキャンプ用の空間として、駐車場をシャワー車のために提供し、地域の活動にも協力的であった。

今後、マカー・ミュージアムのような地域住民と支えあっている博物館は、エルサルバドルのような地域住民による博物館設立を目指す人々にとって地域博物館のよい例となるのではないだろうか。

## おわりに

本プロジェクトに参加する機会をくださった山本直人教授（名古屋大学大学院文学研究科）、アメリカ・インディアンの文化や考古学について懇切丁寧に教えてくださったDale Croes教授（South Puget Sound Community College）とKatherine M. Kelly氏（South Puget Sound Community College大学院生）に感謝いたします。また、市川彰氏（名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程）、池田瑞穂氏（青年海外協力隊エルサルバドル共和国考古学隊員）にはエルサルバドル共和国の博物館に関する情報、本稿執筆のための助言を頂き心より感謝いたします。

## 参考文献

- Croes, Dale R. 1995 *The Hoko River archaeological site complex: the wet/dry site (45CA213)*, 3,000–1,700 B.P. Washington State University Press: Pullman.
- Kirk, Ruth and Daugherty, Richard D. 2007 *Archaeology in Washington*. University of Washington Press: Seattle and London.
- Renfrew, Colin and Paul Bahn 2004 *Archaeology: theories, methods and practice*. Thames & Hudson: London. (First published in 1991, Thames & Hudson: New York.)
- 大井邦明監修, 2000,『チャルチュアパ』, 京都外国語大学: 京都